

## 僕は後悔していない

通りすぎて、すぐ、その様子を見てか、  
彼女のお母さんがニクニクして、  
「出かけるの？お金いる？」と、  
彼女に振り返って尋ねた。

彼女は、お母さんの方を見て、すぐ、  
僕の顔色を見たが、僕は、そのまま、  
彼女の目を見ただけで、何も言わなかった。  
彼女は首をふって、僕と彼女はそのまま、  
表門まで歩いて行った。

僕もそんなにお金持っていないが、  
この際、お金なんかどうでも良かった。

無表情の僕に、歩きながら、彼女は、何度も、  
「遠くから来てくれて、本当に、ごめんね」と言った。  
僕は、聞こえていたが、  
どう答えたらいいか、わからなかった。  
それが、どう言う意味か、わからなかった。

僕は、彼女に会いたくて来た。

別に本当は、「交際してくれ」と、  
その返事をもらいに来たのではなかった。

会いたくて、会えて、僕はうれしかった。

それを正直に僕は彼女に言えなかった。  
彼女に会えただけで、僕はうれしかった。